

# 重文古民家を使つて集落の活性化を

隠岐最古の古民家が地域の核になろうとしている。暮らしの技あつてのおばさんたちの手料理、囲炉裏を囲んだ語りの場、飾らない島の日常が最高のもてなしになる。

## 隠岐のウルトラ古民家「佐々木家」

島根県隠岐郡隠岐の島町が位置する島後は、島根半島の北東約八〇キロに位置し、隠岐諸島のなかで最大の島です。隠岐島の西北約一五七キロには竹島があり、隠岐の島町に属しています。町の人口は、一万六九八六八人。典型的な少子高齢の先端をゆく町です。その東端近くに、釜地区（一六世帯三六八人）という、町でもベスト三に入るぐらいの半農半漁の小さな集落があります。なぜかこの集落に、江戸末期の天保七（一八三六）年に建てられ、建築当初

の形式をそのまま残す民家「佐々木家」があります。旧庄屋屋敷としての家格を今なお伝え、平成四年には国の重要文化財に指定されました。間取りや構造形式に隠岐民家の特徴が存分に示されており、建物の桁行きは長いところで一一間、梁間は約七間、建坪六九坪のかなり大きいものです。杉皮葺きの屋根は三枚ずつ重ねられており、これらを押さえる屋根石は八〇〇個を必要とします。クレインもトラックもない時代、今から一七〇年も前に多くの職人さんの人力によつて築造された大きな大きな家——。ここがいま、時空を超えて私たちが気分よく集える場所、

また、すべての来訪者に不思議な心地良さを与えてくれる場所、地域活力の発信源となりつつあります。

この「ウルトラ古民家」を舞台に繰り広げられる、おばさんたちとその仲間、管理人のおつつあんと役場のあんなちゃんの奮闘物語、ぜひご笑読下さい——。

## チャンス到来

「のぼる君、（佐々木家）に来られた観光客に、お茶のサービスでもできませんか？」

平成一六年も押し追つた寒い時期に、

釜地区の木下のおばさんから問いかけられました。

「そろそろいいことだ、最終的には昼食が出せることを目標にしようや」

ただ単純に思ったことを言ってしまったんです。僕のこんな無責任な発言にも触発され、おばさんたちの疾走があつという間にスタートしたのでした。とはいってもこのおばさんたち、平成一年ごろより、毎週日曜日の朝七時から町内某所での朝市に、海産物や餅、さざえご飯、押し寿司などといった自慢の品を出品、ヒット商品を出し、顧客も獲得している実力者ばかりだったのです。

僕と釜地区との関わりは、単に役場の観光担当職員としてだけではありませんでした。僕が釜地区の隣の集落の間で、地区の運動会も収穫祭も釜地区と一緒に、おまけにお袋が釜地区出身ということもあり、幼少のころからの地区内での知名度バツグンでした。あわせてこの界限では、ただ一人の現役役場職員ということもあって、さし

て役に立ったことはないものの、「よろず相談窓口化」していたのであります。

とはいえ、長年朝市で裏打ちされた自信と、機が熟したと言わんばかりに走り出した勢いにはもうブレーキはかけられず、僕のなかでは半ば見切り発車で何となく準備が始まっていったのでした。

### 合致したタイミン

まず、厨房施設の建設が必要でした。役場のなかで起業時の助成金探しに奔走するも、すべて不発に終わり、あれよあれよという間に季節はめぐっていったのです。ところが、桜の花が咲きかけるころには、造成された土地に保健所の指導、認可を受けた立派な厨房施設が忽然とその勇姿を見せたのでありました。はるか日本海の水平線を見下ろせる自前の土地に、おばさんたちが自己資金を投資して建設されたその牙城は、昇る朝日に照らされて活躍の時

を待っていました。

おばさんたちの意気込みには、もう一つチャンスが重なっていました。佐々木家の管理者が新たに定まったのです。じつはこの文化財住宅、町の教育委員会管轄のもと、平成一四年一月から二年半余りの日数を要した解体保存修理を終え、一七年四月からリニューアルオープンすることになり、地域出身者の吉田弘・幸二というリタイアしたばかりの兄弟が管理者として、また施設ガイドとしてデビューすることになり、ハード管理とソフト提供の布陣が整ったことも、行動を起こさせるきっかけとなりました。

朝市に軽トラックで二〇分かけて出掛けるよりも、嫁いできてから体得した力を歩いて通える生活圏のなかで発揮し、来訪者が増加すれば地域のにぎわいにもつながり、さらに外貨獲得となればこんな効率的なことはありません。このきっかけをチャンスと捉えた前向きな欲求がパワーの源だったのです。

## 力試しのときがきた!

準備は整ったとはいえ、リニューアルオープンしても客足は増えませんでした。二年半の間、観光パンフレット上から遠ざかっていたハンデは大きく、ひそかに画策した小集落のたくらみなどもちろん誰の知るよしもありません。

梅雨明け間もない、蝉の大合唱が耳につき出したある夏の暑い日、転機が訪れました。「佐々木家住宅解体保存修理完成記念神楽公演」。佐々木家でとてもなく長いタイトルの御神楽を上演することになったのです。千載一遇のチャンスとばかりに、訪れた二〇〇人からのお客に、「釜の海」「釜の畑」「釜の山」で採れたものを素材として、「サザエのご飯」「押し寿司」ところ天」などを提供しました。その結果、見事に完売し、進むべき方向に確信を持ちました。その後、「完成記念講演」「大久地区敬老会」など月一回のペースで六〇〇円

の弁当提供を着実に経験し、メニュー、料金、スタッフの体制など実践、反省を繰り返し、徐々に自分たちのスタンスと活動のなから得られる手ごたえを確実に肥やしにしながら、冬の陣を迎えるのでした。

## 観光のプロたちとの連携

本来であれば、一二月から二月いっぱいまで冬季は閉館する佐々木家でした。誰が名付けたかシーズンオフなどという言葉。ここに限らず隠岐の島の観光施設にはよくある話でしたが、夏から秋にかけての頑張りが口コミで広がり、やがて観光協会の耳にも入ることとなりました。「冬場の観光商品創出」などという聞きなれない単語とともに、冬の間にお客を隠岐の島に導く作戦の舞台に佐々木家を使おうという願ってもない、初めて経験する話が舞い込んできました。いわゆる観光ツアーというやつで、ターゲットは名古屋の人たちらしい。メニューや料金の改

善、やるとなったら正月もおちおち休んでられないぞ! 現場でのコタツ会議の結果、いとも簡単に「やろう!」と決定されたのはいうまでもありません。悪くいえば短絡的、よくいえば実力者のスピーディーな決断力。このおぼさんたちは、次のステップに駆け上がるとき、つねにっこり笑って「はいやりましょう!」「どうせやるならこれをやろう!」と、とにかく話が速く、懐が広いせいか次々とアイデアが湧いて出てくるのです。ハンコを押しまくり、書類とやらがきれいに色づかないと原則行動が起かせない某役所とは大きなギャップが……。

昼食代は一二〇〇円に、語り部ガイドの付加価値をつける。例年になく大雪のなか、夜はお宿で隠岐ガニ、昼は佐々木家で昼食、を売り文句に越冬ツアーが実践されたのでした。

いいことばかりではないものの

結局、三六人の集落に、今シーズン

は八ヶ月間で二〇〇〇人オーパーの来訪者がありました。人口の約六〇倍の往来となります。

地域の活性化、賑わい、新たな生産活動の創出……、ここまでだと順風満帆に見える釜のおばさんたちの活動ですが、悩み事もなくはないのです。小さい集落がゆえの特殊事情もそこにはあります。誰かが脚光を浴びると嫉妬するのが人の心。人が集えば自然と車も増え、駐車場不足からみんなの生活道路に車列ができればたちまち障害物に早変わり。いらだつ人が現れるのもこれまた現実でした。

でも、普段の地域活動には尾を引かず、場面が変わればにつこり笑ってお互いさまで助け合いながら、地区運営は肅々と進めていかなければなりません。小さな集落、みんなの顔が丸見えのなかで生活していくことのバランスの難しさもあります。

### 「佐々木家住宅」とは

隠岐島後の東端近く、釜地区にある隠岐最古の木造住宅。母屋は杉皮葺きの石置き屋根で切妻造平入り、直接カミノマが見えない鍵座敷、三ヶ所の入り口を持つなど、「隠岐造り」の特徴をよく伝えている。佐々木家は、宇治川の合戦（1180）の先陣争いで知られた佐々木四郎高綱が遠祖と伝えられ、釜において代々庄屋を務めた家柄で、現在の住宅は天保7（1836）年の建築。昭和40年、佐々木家の生活用具57点が島根県の有形民俗文化財に指定。平成4年には、母屋すべてが「佐々木家住宅」として国の重要文化財に指定された。



そこで思いついたのは、佐々木家で昼食を提供することによって地区にプラスをもたらせばいい、ということですよ。佐々木家で食事をいただくときのテーブルは、じつは地区集会所の持ち物です。これを借用し、使用料を支払えば地区の収入になり、獲得外貨によって地区財源の一部に充当されるはず、佐々木家を満喫した都会の人たちが、

その代償として「ありがとう」の心のしるしに置いていってくれたと思えるようになれば、むしろ「来てくれてありがとう」になっってくるはずですよ。

### 「らしさ」を見失わず

夏は「そうめん」「ところ天」、焼き物はすべて囲炉裏を使い、「べっこ（世間ではアメフラシ）」「亀の手の吸い物」「さざえご飯の巻き寿司」「押し寿司」「玉ねぎの粕漬け」、デザートは「吊るし柿」に至るまで、自分で手掛けた地場産品を提供しています。信念は次の二つです。

一、季節の旬しか出しません。隠岐の四季をお楽しみ下さい。一、日常自分たちが食している物をそのままのスタイルで楽しんで下さい。大皿に盛ってお出します。

幸いに、今年の冬も「隠岐

「ガニツァー」を実践することになり、昨年は旅行会社が一社だったのに今年には三社で募集するらしいとのこと。やれ催行だのクーポンだのそれらしい専門用語が並んではいるものの、「やっぱ現金がいい」。観光協会の人との会話にも自己主張が出るようになってきました。

さっそく、コタツ会議ならぬ囲炉裏会議で戦略を練り出したのが新メニューへの挑戦。といってもおばさんたちの数あるレパートリーのなかから一つ引き出すだけのことにはすぎません。「隠岐オリジナル」の高いこの冬の新メニュー、いまから僕も楽しみです。きっとお客も満足してもらえはるはずですよ。お客の満足度の高さには、料理の個性もさることながら、一七〇年の歴史の重みが醸し出す、太い大黒柱に支えられた圧倒的な高い天井空間の心地良さがあります。囲炉裏を囲むと会話が弾み、誰も腰をあげようとしません。炭をいじつてみたり、芋を焼いてみたり、地元の人も初めて出会った人も、

テレビもラジオも電話もインターネットもなく、携帯すらろくすっぽつながらない、結局、人同士が会話をしている、いまだきめずらしい空間が意外に好評なのであります。

気づいたことは数々あれど、実践活動であらためて感じたことは、都会の人との価値観の違いです。私たちの日常こそが、島外の方には非日常でまさにサプライズである様子なのです。だったら簡単なこと、背伸びせず、着飾らず、普段通りにやればよいだけのことです。春には桜が咲き、夏はヒグラシが鳴き、秋には稲穂の香り漂い、寒い冬には大きなつららが出現する……隠岐の自然と一緒に、私たちもごくごく普通に振る舞うことが、何より大きなおもてなしになるのです。

今年いちばんうれしかったことは、なんと「リピーター」が現われたことです。春来てくれたお客が夏にまた来てくれたのです。意外に釜のおばさんたちはサバサバしてますが、どうやらこの古民家は「回帰の空間」でもある

らしい。「田舎の親戚で食事をよばれているみたい」「うちも昔はこうだったな」。都会ではすでに失われたものが、まだ僕らの島には確実に存在していることの証明のような気がして、何となくうれしいのです。古い器を惜しげもなく使える贅沢感による満足度も高い模様です。あなたのためにこの文化財、どうぞ思う存分ご利用下さい。

### 役割分担が見えてきた

四〇〇円の入館料分の満足を与えようと、新米ガイド二人の案内弁舌も軽やかになり、空いた時間には周囲の草刈り、ときには屋根の修繕までこなします。おばさんたちは一六〇〇円分の食材について、四季を通じて段取りを考えるようになっていきます。海に、山に、畑に出掛けることも活発化し、隣りの集落から食材の提供も始めるなど、じわりじわりと協力者も増えてきたことを実感しています。僕もスポークスマンとして、下手な新聞記事を書いて



屋内で「旧周吉郡東郷神楽」(町指定無形民俗文化財)の公演を実施。



佐々木家で出される地元の食材を使った手料理の数々。



澄田信義島根県知事も来所。にっこり笑って記念写真。



この600円の弁当から始まった。このほか、煮しめ、ニイナ貝の吸い物、お茶がつく。



鍋料理は囲炉裏を使って温める。



名古屋からのツアーのお客様。こたつや火鉢、囲炉裏で暖をとってもらおう。

は投稿したり、雑誌、テレビの取材をアテンドしたり、旅行者からの予約受付をしたりしています。  
そんな、みんなの努力の甲斐あって、平成一八年四月から一月までの入館

者は二七四人。そのうち、食事を提供させていただいたのが五五四人で、確実に前年は上回っています。  
「世話を焼かないと何も生まれず、人に気持ちは伝わらない」。これは、みん

まで得た財産の一つです。それは島での生活だろうが、都会だろうが同じこと。至極当然のことですが、いまや首が飛んでも血も出ないような看板だけの知識人が増殖し過ぎています。こん

な当たり前のことをこつこつと地道に継続する術を見失った輩たちを尻目に、うちのおばさんたちは今日も土を耕し、海の恵みに味付けし、朝も早くからごく普通に、そして当たり前前に、やっばり働くのです。

また会いましょう！

前向きな食欲さはどんどんヒートアップする一方。おばさんたちの行動は落ち着いていて、スタッフ間の意思疎通もいまのところバッチリです。季節を重ねることに自信が植え付けられ、最近では町内の人の利用も増えてきま

### おきとうご 隠岐島後 data

島根半島の沖合に位置する日本海の島。隠岐諸島のなかでは最も大きい。面積241.58km<sup>2</sup>、周囲211km、人口16,972人(平成19年1月現在)。漁業を基幹産業とし、農業では稲作、葉タバコ、豆類などを主としている。暖流と寒流が合流する島でもあるため、北方系、南方系の植物が混生。独自の生態系を活かした観光産業にも力を入れている。平成16年10月に島後4町村が合併し、「隠岐の島町」となった。



した。

「ビジネス」などという言葉は似合いませんが、しかし「ボランティア」では長続きしません。私たちは「外貨」をしっかり頂戴し、少しは商売の楽しみも感じています。何よりこの島の人たちは、この地に生きる証として、これからも隠岐の季節がめぐるなかで一所懸命働くでしょう。お客の数は気になるものの、あんまり数値ばかりを追いかけて過ぎないようにしようといつも話しています。もてなしの味が薄くなるのがいちばん後味悪いことだからです。ここには「ローカル食」しかありませんが、都会の方に「隠れ我が家」みた

いに使ってもらい、自分たちの生産活動の場でもあって、お互いさまで高い満足を共有し合う。そんな場所になればいいなと思っています。

最近思うことは、いつまでおばさんたちが元気かな、ということなんです。しかし、心配はしていません。将来、管理人は僕がするとして、集うことが楽しみになっているいまの現場の雰囲気を感じてもらえば、きっとそのうち素敵なお姉さんたちが後継者となって現れることでしょう。

にっこり笑って、「また会いましょう！」。一仕事終えた後の別れ際、これがいつもの合言葉です。

### 鳥井 登(とりい のぼる)

隠岐の島町大久(釜地区の隣の漁村集落)出身。平成4年に大阪からUターン、西郷町(現隠岐の島町)役場に勤務。職務にこだわらず地域内で動いている自称「スーパー嘱託員」。昭和39年生まれの前フォークソング世代で、趣味はバンド活動。自作オリジナルソングが「隠岐の島ウルトラマラソン」の大会イメージソングに採用され、現在は隠岐の島町役場のHPで大会ビデオ映像のBGMとして配信。